



31 宝探し

(スペインの昔ばなし)

「この世で最も尊い物を持って来た者が、姫と結婚するがよい。」

隣国の美しい姫との結婚を望んだ三人の王子が、自分たちの父である王に相談すると、そう告げられました。王子たちは、それぞれ旅に出ました。

一番上の兄は世にも珍しい空飛ぶ絨毯を、

二番目の王子はどこまでも見通せる不思議な望遠鏡をついに見つけました。

そして、心の優しい末の王子は、どんな病でも治す奇跡のリンゴを選び、手に入れました。

三人が出会い、空飛ぶ絨毯で城へ帰ろうとしました。

しかし、望遠鏡をのぞくと、なんとあの美しい姫が重い病に倒れているではありませんか。

三人は飛んでいき、末の王子が、リンゴで姫のほおをこすりました。

すると、姫の病はたちどころに治りました。

父王は、病の姫を見つけた望遠鏡が一番尊いと考えましたが、姫の言葉は違いました。

「病を治したいという優しい心が、一番尊いと思います。」

どんな宝物よりも心の尊さを選んだ姫は末の王子と結婚し、いつまでも幸せに暮らしました。

世にも珍しい宝物より、尊いものがありました。

ローム君の新・博物日記

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

●昔の恋愛観の違いが出ています。

「宝探し」は、スペインをはじめ、世界中に類話がある話です。日本の昔ばなしでは、「弟出世」という話が比較的似ています。この昔ばなしは、跡継ぎを決めるときに、三人の兄弟のうち最も優れた技を習得した者を後継者にする、という展開になります。ここでも一番下の弟が最も優れているとされ、村の長者が賞賛し、自分の娘を嫁に…という展開になります。それに対して「宝探し」では、王子の父は二番目の王子が相手としてふさわしいと言ったのに対し、はっきりとお姫様の意志で、三番目の王子が相手に選ばれています。一般的に、西洋のこのタイプの昔ばなしは、「女性の意志」が重要視されることが多いのだとか。かつての東西文化の違いが現れていて、面白いですね。

●リンゴの持つ二面性。

この昔ばなし「宝探し」では、リンゴが重要なアイテムとして登場しました。昔ばなしでリンゴ、と言えば「白雪姫」の毒リンゴを連想します。どんな病も治すリンゴと毒のリンゴ。正反対のことを象徴しているように見えますね。古代のギリシャ・ローマでは、リンゴは愛や豊饒の象徴とされていました。いくつかの昔ばなしでもその流れを汲み、求愛や生命を司るものとして登場します。一方、リンゴには、アダムとイヴが食べた禁断の果実としてのイメージもあります。この罪や誘惑のイメージは、昔ばなしで「敵に

死を与えるもの」という意味にも変化しました。白雪姫の毒リンゴは、その流れを含んでいるようです。リンゴには生命力と、その裏返しの二面性があり、それが昔ばなしにも反映されてきた、というわけですね。

●種を植えても、親の種類の実にならない!?

「ふじ」という種類のリンゴから取った種を植え、数年後、リンゴを収穫する時がやって来ました。しかし、それが「ふじ」という種類になる確率はほとんどありません。つまり、リンゴは種から育てても、同じ種類のリンゴになることは、まずないのです。では、日本に流通しているリンゴの約半数が「ふじ」の仲間ですが、そんなに大量の同じ種類のリンゴを、どうやって作っているのでしょうか。実はリンゴには、「接木」という方法があります。別の種類のリンゴの枝を割り、そこに増やしたい種のリンゴの枝の一部分を差し込んで固定します。後は、その枝が木と一体化して生長し、求める種類の実をつけるのです。この接木を「苗木」の段階からする方法で、出荷用のリンゴの実をつけるリンゴの木は栽培されるのです。元々の「ふじ」は、交配により奇跡的な確率で生まれた一本。その原木は、現在岩手県にある一本だけです。昔ばなしのリンゴも、そんな、奇跡の原木になった実だったのかもしれないね。

昔ばなし監修/昔ばなし研究所所長 小澤俊夫
取材協力/三水アップルミュージアム館長 小林一成